



黒澤 亜里子 (くろさわありこ) 先生

# 黒澤亜里子先生の略歴と主な業績

## 【略 歴】

- 一九五二（昭和二七）年九月二二日
- 一九六八（昭和四三）年四月
- 一九七一（昭和四六）年三月
- 一九七二（昭和四七）年四月
- 一九七七（昭和五二）年三月
- 一九八一（昭和五六）年四月
- 一九八三（昭和五八）年三月
- 一九八三（昭和五八）年四月
- 一九八九（平成元）年三月
- 一九八九（平成元）年四月
- 一九九〇（平成二）年五月
- 一九九〇（平成二）年九月
- 一九九一（平成三）年三月
- 一九九一（平成三）年四月
- 一九九二（平成四）年七月
- 一九九四（平成六）年三月

栃木県栃木市に生まれる

栃木県立女子高等学校入学

同卒業

早稲田大学第一文学部入学

同仏文学科卒業

法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻博士前期課程入学

同修了

法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻博士後期入学

同単位取得退学

沖縄国際大学短期大学部国文科講師、同大学文学部国文学科講師を兼任

那覇市女性学専門委員会委員（一九九一年三月まで）

琉球大学法文学部非常勤講師（二〇〇九年三月まで）

湯浅芳子の会設立発起人・常任理事

沖縄国際大学短期大学部国文科助教授

中華人民共和国東北師範大学、平成四年度沖縄県人材育成財団国外派遣員

（同年九月まで）

博士（文学）の学位を取得（法政大学）

論題「田村俊子研究―『両性の相剋』という主題をめぐる―」

一九九四（平成六）年四月

沖縄国際大学短期大学部国文科教授

一九九六（平成八）年四月

沖縄国際大学文学部国文学科教授

一九九七（平成九）年四月

沖縄国際大学大学院地域文化研究科南島文化専攻言語文化領域教授を兼任

二〇〇一（平成一三）年四月

沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科教授

二〇〇二（平成一四）年四月

東京大学大学院人文社会系研究科社会学研究室、国内研修員

（二〇〇三年三月まで）

二〇〇四（平成一六）年四月

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター、国内研修員

（二〇〇五年三月まで）

二〇一七（平成二九）年四月

沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科特任教授

二〇一九（平成三一）年四月

沖縄国際大学大学院地域文化研究科研究科長（二〇二一年三月まで）

二〇二一（令和三）年三月

沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科特任教授退任

## 【主な研究業績】

### I 編著書

- 1 『女の首―逆光の智恵子抄』 単著 ドメス出版 一九八五年
- 2 『田村俊子作品集』 全三巻 共編 オリジン出版センター 一九八七年十一月～一九八八年九月
- 3 『逆光の智恵子抄』 再録単著 学陽書房女性文庫 一九九七年
- 4 『占領と文学』 オリジン出版センター 共編 一九九三年
- 5 『沖国大がアメリカに占領された日―8・13米軍へり墜落事件から見えてきた沖縄／日本の縮図』 編著 青土社 二〇〇五年
- 6 『往復書簡 宮本百合子と湯浅芳子』 編著 翰林書房 二〇〇八年
- 7 『田村俊子全集』 全九巻 監修・編 ゆまに書房 二〇一〇～二〇一七年

### II 単行本・全集掲載論文等

- 1 『『婦人文藝』・解説』（復刻版『婦人文芸』 全十巻別冊一、不二出版）一九八七年 五―一頁
- 2 「田村俊子・解説」（『田村俊子作品集』第二巻、オリジン出版センター）一九八八年 四二七―四三七頁
- 3 「田村俊子・解題」（『田村俊子作品集』第三巻、オリジン出版センター）一九八八年 四二五―四四三頁
- 4 「夢のキッチン・吉本ばなな論」（『NEW FEMINISM REVIEW』VOL.1学陽書房）一九九〇年 一三四―二五一頁

- 5 「少女たちの地下同盟 吉屋信子の「女の友情」をめぐる」(『NEW FEMINISM REVIEW』VOL.2 学陽書房) 一九九一年 八一―九五頁
- 6 「恋愛の政治学 屋根裏の少女たち」(『変貌する家族2 セクシュアリティと家族』岩波書店) 一九九一年 三九―六〇頁
- 7 「近代日本文学における〈両性の相剋〉問題——田村俊子の「生血」」(『ジェンダーの日本史』下巻、東京大学出版会) 一九九五年 二五九―二八八頁
- 8 「一九二二年のらいてうと紅吉——「女性解放」とレズビアニズムをめぐる」(『文学・社会・地球へ』三一書房) 一九九六年 三〇九―三二七頁
- 9 「近代女性作家の戦略と戦術——向田邦子を読む」(『沖繩国際大学公開講座3 女性研究の展望と期待』沖繩国際大学公開講座委員会) 一九九六年 一二九―一六八頁
- 10 「出郷する少女たち——一九一〇―二〇年代 吉屋信子、金子みすず、尾崎翠、平林たい子、林芙美子ほか」(『文学史を読みかえる2 「大衆」の登場―ヒーローと読者の20〜30年代』インパクト出版会) 一九九八年 七八―九七頁
- 11 「田村俊子「生血」／ジェンダーと〈性〉」(『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房) 一九九八年 九八―一〇一頁
- 12 「尾崎翠と少女小説―新しく発見された一群のテクストをめぐる―」(『定本尾崎翠全集』下巻 筑摩書房) 一九九八年 四三九―四五三頁
- 13 Modern Japanese Literature and the "Rivalry Between the Sexes": On Tamura Toshiko's "Kichi" (Life Blood) *Gender and Japanese History, Volume 2. Osaka University Press 1999 pp.253-280*
- 14 「琉歌と和歌という境界―共同体、身体、ジェンダー表象をめぐる―」(『短歌と日本人4』詩歌と芸能の身体感覚』岩波書店) 一九九九年 一九八―二四三頁
- 15 「吉屋信子『私の雑記帳』解説」(『女性の見た近代 第一期第二二巻 吉屋信子 私の雑記帳』ゆまに書房)

- 二〇〇〇年 四一〇―四一三頁
- 16 「IV作家別研究の現在・田村俊子」（『女性文学を学ぶ人のために』世界思想社）二〇〇〇年 一〇七―一一二頁
- 17 「山城正忠『九年母』解説」（『沖縄文学選―日本文学のエッジからの問い』勉誠出版）二〇〇三年 三八―四〇頁
- 18 「目取真俊『虹の鳥』論―日常の細部を浸潤するへ暴力」（『沖国大がアメリカに占領された日―8・13米軍へり墜落事件から見えてきた沖縄／日本の縮図』青土社）二〇〇五年 二四―二五七頁
- 19 「Y・Yカンパニー論」（『往復書簡 宮本百合子と湯浅芳子』翰林書房）二〇〇八年 五八五―六七九頁
- 20 『新編日本のフェミニズム11フェミニズム文学批評』（『女の首』抄録）共著 岩波書店 二〇〇九年 九七―一〇八頁
- 21 「解題」（『田村俊子全集』第一巻 五六七―五九〇頁、第三巻 三六七―三九〇頁、第七巻 七四―一七五七頁、第八巻 九二―一九七七頁、第九巻 七三―一七四五頁、七八―一七九七頁 ゆまに書房）二〇一二年（二〇一七年）
- 22 「尾崎翠と少女たちの時空―「変な女の子」はどこから来てどこへ行ったか？」（『尾崎翠を読む 講演篇I』今井出版）二〇一六年 一〇四―一二五頁
- 23 「崎山多美の文体戦略 ―「シマコトバでカチャーシー」を切り口に」（『沖縄国際大学公開講座26 しまくとうばルネッサンス』沖縄国際大学公開講座委員会）二〇一七年 一一三―一四七頁
- 24 「白鸚鵡・解説」（『白鸚鵡 吉屋信子少女小説集3』文遊社）二〇一八年 二九九―三一八頁
- 25 「尾崎翠」九四頁、「金子みすず」七八頁、「高村智恵子」三一八―三一九頁、「田村俊子」三三三頁、「秋元松代」九頁（『岩波 女性学事典』岩波書店）二〇〇二年
- 26 「高村智恵子」（『日本女性史大辞典』吉川弘文館）二〇〇八年 四五五頁

### III 學術雜誌掲載論文等

- 1 「智恵子抄」 試論―高村智恵子と近代」（『法政大学大学院紀要』一三三号 一九八四年十月）五一一―七三頁
- 2 「遊女」から「女作者」へ―田村俊子における自己定立の位置をめぐって」（『法政大学大学院紀要』一四号 一九八五年三月）七一一―七八頁
- 3 「田村俊子ノート ―平塚らいてう・森田草平の『炮烙の刑』論争を中心に」（『日本文学論叢』別冊 一九八七年三月）
- 4 「津島佑子論―「寵児」のパラドックス」（『而シテ』一八号 一九八七年十月）六四―七二頁
- 5 「渡加前後の田村俊子・俊子、悦書簡・日記をめぐって」（『日本文学誌要』三八号 一九八七年十二月）一一―一八頁
- 6 「「煤煙」とその周辺―「前編」/「後編」の破綻の意味をめぐって」（『沖縄国際大学文学部紀要 国文学篇』一八卷二号 一九八九年十二月）八三一―一〇七頁
- 7 「大正期少女小説から通俗小説への一系譜―吉屋信子の「女の友情」をめぐって」（『沖縄国際大学文学部紀要 国文学篇』一九卷二号 一九九〇年八月）六五一―八九頁
- 8 「ベッドの中の戦場」（『群像』四五卷六号 一九九〇年六月）二五二―二五六頁
- 9 「田村俊子と女弟子―新発見の湯浅芳子日記・書簡をめぐって」（『沖縄国際大学文学部紀要 国文学篇』一九卷二号 一九九一年三月）一三三―一五九頁
- 10 「田辺聖子私論」（『季刊フェミナ』一〇号、学習研究社一九九一年七月）一四八―一五七頁
- 11 「尾崎翠とその周辺〈老嬢のいる風景〉」（『季刊女子教育もんだい』六一号 一九九四年十月）二四―三三頁
- 12 「『女声』とその周辺―日中十五年戦争下の文学の比較・交流研究」（沖縄県人材育成財団編『国内・国外派遣研究員研究報告書』四 一九九五年三月）四二―六二頁
- 13 「平塚らいてう」という身体の周辺―「解剖学的まなざし」「処女」「貞操」「純潔イデオロギー」（『日本近代文

- 学』五三集 一九九五年十月) 二〇七―二二三頁
- 14 「親指Pとの対話―「優しい去勢」をめぐる」(『群像』五二巻五号) 一九九七年五月) 二九二―三〇九頁
- 15 「崎山多美の「ゆらていくゆりていく」をへゆんたくひんたく」読む」(『ユリイカ』三三巻九号 二〇〇一年八月) 一八八―一九四頁
- 16 「女性芸術雑誌『番紅花』と尾竹一枝」(『彷彿月刊』一七巻二号 二〇〇一年一月) 一四―一九頁
- 17 「咲き揃う女／母／労働者―「道標」期前後の宮本百合子テキストに見る女性表象」『立命館言語文化研究』第一六巻二号 二〇〇四年十月) 二五一―五一頁
- 18 「La mémoire de la terre」『VACARME』33, octobre 2005, P96-98
- 19 「田辺評伝の魅力」(『国文学解釈と鑑賞』別冊(特集・田辺聖子―戦後文学への新視覚) 二〇〇六年七月 九五―一〇七頁)
- 20 「尾崎翠の新資料解題・雪の上」(『尾崎翠フォーラム2006in鳥取報告集』vol.6 二〇〇六年十二月) 四七―四八頁
- 21 「宮本百合子ノート 中條葭江「欧州旅日記と「旅日記の中より」の異同をめぐる」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』一六巻一号 二〇一一年十月) 七九―一一一頁
- 22 「宮本百合子ノート(2)『葭の影』とその周辺―中條精一郎著「中條葭江略伝」をめぐる」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』一六巻二号 二〇一二年三月) 六三―七四頁
- 23 「吉屋信子と郡立栃木女子高等学校―台覧作文、校友会寄稿文、講演記録など」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』二〇巻二号 二〇一六年三月) 八九―一〇七頁
- 24 「田村俊子と汪精衛―『雙照樓詩詞藁』の三篇の詩をめぐる」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』二二巻一号 二〇一七年九月) 一一五―一三二頁
- 25 「崎山多美と「四つの名前」(付・略歴、著作リスト)」(『社会文学』五〇号 二〇一九年七月) 五二―五六頁



#### IV 書評・その他

- 1 「智恵子抄」への旅（『墨』特集高村光太郎―書とその造形 一九八五年三月）六一―六八頁
- 2 「富岡多恵子著「水獣」（『週刊読書人』一九八六年一月六日）
- 3 「吉屋信子と栃木」『うづまつこ』一九八六年十一月 三九―四三頁
- 4 「岩織政美著「永島暢子の生涯」（『図書新聞』五六七号 一九八七年十一月七日）九面
- 5 「文学作品に見る性の荒野」（『86性の研究会レポート』大阪府立婦人会館 一九八七年三月）一〇五―一二三頁
- 6 「年譜」（『田村俊子作品集』第三巻 オリジン出版センター 一九八八年）四四五―四六五頁
- 7 「田村俊子と智恵子」（『彷彿月刊』一九八八年九月）一一―一三頁
- 8 「田村俊子と上海―晩年の足跡を訪ねて」（『図書新聞』六一六号 一九八八年十一月十二日）八面
- 9 「〈視線〉の辛辣―女性と性表現の現在」（『週刊読書人』一七七三号 一九八九年三月六日）
- 10 「ベッドの中の闇」（『季刊フェミナ』第一巻四号 一九九〇年二月）二六八―二七四頁
- 11 「ボディ・ビルと自然」（『フェミナーナ』四号 一九九〇年六月）三一―六頁
- 12 「唐獅子」（『沖縄タイムス』一九九〇年一月―六月）
- 13 「ヴィヴァ・ヘルメス」（『季刊 へるめす』一九九〇年一月）四二―四三頁
- 14 「リレーエッセー 昨日今日明日「鶴ちゃん」とビートたけしの女」（『琉球新報』一九九〇年一月二十四日）四面
- 15 「田辺聖子 人と作品―しなやかな叛骨」（『青春と読書』二五巻七号 一九九〇年七月）七一―一頁
- 16 「差異のダブルクロス―フェミニズム批評の実践」（『週刊読書人』一八五〇号 一九九〇年九月十七日）五頁
- 17 「レナーテ・D・クライン編「不妊」（『朝日ジャーナル』一六九七号 一九九一年五月二十四日）一八―三頁
- 18 「女性表現の深層 フェミニズムの彼方」（『週刊読書人』一八八九号 一九九一年七月一日）六頁
- 19 「魔術の本」（『翻訳の世界』一六巻七号 一九九一年七月）七八頁

- 20 「田村俊子著書目録」(『田村俊子』講談社文芸文庫 一九九四年) 三三二―三三三頁
- 21 「男性作家を読む」(『週刊読書人』二〇六〇号 一九九四年十一月十八日)
- 22 「池澤夏樹―詩的文学者」(『沖縄タイムス』一九九六年十二月十一日) 十二面
- 23 「沖縄のジェンダー表象としての〈おぼあ〉考―大城立裕「亀甲墓」を基点に」(『文学時評』一一七号 一九九七年十一月二十日) 一頁
- 24 「新刊紹介 中山和子・江種満子編『総力討論ジェンダーで読む「或る女」』(『国文学 解釈と鑑賞』一九九八年九月) 一七七頁
- 25 「一九九八年夏、沖縄／鳥堀交差点」(『群像』五三卷一〇号 一九九八年十月) 四〇〇頁
- 26 「〈首里城〉というメタファー」(『群像』五三卷一一号 一九九八年十一月) 三三八頁
- 27 「曼陀羅」と「巨大ひんぷん」(『群像』五三卷一二号 一九九八年十二月) 二八七頁
- 28 「IVカルチャーの現在・日本の女性作家たち」(『新・社会人の基礎知識101』新書館) 二〇〇〇年一七八―一七九頁
- 29 「ブックレビュー 上杉省和著「智恵子抄の光と影」」(『日本近代文学』六二集 二〇〇〇年五月 二六三頁)
- 30 「学内民主主義は機能したか 上・下―検証・へり墜落から10カ月余」(『琉球新報』二〇〇五年七月四―五日) 二二面、一七面
- 31 「二度もなかった「戦後」―沖縄・米軍へり墜落事故から1年」(『東京新聞』夕刊 二〇〇五年八月十九日) 八面
- 32 「沖国大へり墜落 この一年で見たこと」(『沖縄タイムス』二〇〇五年八月二十三日) 一三面
- 33 「尾崎翠と少女たちの時空」(『尾崎翠フォーラム2006in鳥取報告集』vol.6 二〇〇六年) 九―二二頁
- 34 「書評リプライ」(『論叢クイア』第一号掲載の書評に対して)『往復書簡 宮本百合子と湯浅芳子』(『論叢クイア』第三号 二〇一〇年) 一八四―一九一頁
- 35 「崎山多美著「月や、あらん」」(『沖縄タイムス』二〇一二年十二月二十二日) 二二面

- 36 「解説に代えて」(大野隆之『沖縄文学論…大城立裕を読み直す』編集工房東洋企画 二〇一六年三月)
- 37 「大島真寿美「ツタよ、ツタ」」(『中日新聞』夕刊二〇一六年十一月十一日) 九面
- 38 「富永悠介〈あいだ〉に生きる ある沖縄女性をめぐる経験の歴史学」『越境広場』六号 二〇一九年九月  
二〇二一—二〇四頁
- 39 「劇団青い鳥」公演に寄せて」(『琉球新報』二〇二〇年二月二十九日) 一七面
- 40 「島尾ミホ・再訪」(『南島文化研究所所報』六五号 二〇二〇年三月) 八頁
- 41 「山口組姉」との出会いと別れ」(山口美代子聞き書きの会編『M・Yの軌跡—資料と女性史ひとすじの道』  
二〇二〇年) 一〇三—一〇六頁

## V 対談・座談会等

- 1 「近代恋愛の罟を暴く文芸批評の新星」(島崎今日子『女学者丁々発止—われいかにしてフェミニストになりし  
や&ならざりしや』学陽書房 一九九〇年) 五九—七七頁
- 2 「対談・情念のシステムは超えられるか」(小倉千加子『対談 偽悪者のフェミニズム』学陽書房 一九九一年)  
二二三—二五三頁
- 3 「鼎談 愛と生存のかたち—湯浅芳子と百合子の場合」(特集Ⅱ宮本百合子の新しさ) (『国文学 解釈と鑑賞』  
71(4) 二〇〇六年四月) 六一—二七頁
- 4 「座談会・沖縄—ディストピアの文学」(特集「復帰」35年オキナワの「心熱」) (『すばる』29(2) 二〇〇七年  
二月) 一七二—一九一頁
- 5 「座談会 文学的想像力を通じて〈岐路〉を問い直す」(特集「生きる技法」としての文化／想像力…岐路) に  
あつて考える」(『けーし風新沖縄フォーラム』九一号 二〇一六年七月) 六一—一九頁

## VI 学会発表・シンポジウム・共同研究ほか

- 1 「〈制度〉としての『智恵子抄』」(日本文学協会(第六回研究発表) 於: 学習院大学) 一九八六年六月
- 2 「渡加前後の田村俊子」(法政大学国文学会 於: 法政大学) 一九八七年七月
- 3 「日本近代文学に見る性愛の問題―田村俊子を中心として」(於 大阪国際交流センター) トヨタ財団平成三年研究助成金「日本における性役割分担の史的研究」脇田晴子(研究代表) 一九九三年七月六―八日
- 4 「ワークシヨップ「沖繩で書くこと―何をどう書くか」司会」(沖繩文学フォーラム「沖繩・土着から普遍へ―多文化主義時代の表現の可能性」 一九九六年十二月十六日)
- 5 「〈花物語〉という過剰」(日本近代文学会十一月例会 於: 大妻女子大学) 二〇〇二年十一月三十日
- 6 「セツシヨン」沖繩をめぐる発話の位置」The Position of Speech concerning Okinawa 司会: コーディネーター」(カルチュラル・タイフーン2004) 沖繩 於: 琉球大学) 二〇〇四年七月九日
- 7 「宮本百合子作品にみるセクシュアル・アイデンティティの揺らぎ―「咲き揃う女／母」の表象をめぐる」(第一二九回シマ研究会発表会 発表 於: 沖繩国際大学南島文化研究所) 二〇〇四年七月十二日
- 8 「咲き揃う女／母／労働者―「道標」期前後の宮本百合子テキストに見る女性表象」(公開シンポジウムプロジェクトA1労働のジェンダー化パート3 アンペイド・ワーク 2004 於: 立命館大学) 二〇〇四年十二月十三日
- 9 「沖繩国際大学 緊急シンポジウム「沖国大がアメリカに占領された日―8・13米軍ヘリ墜落事件と住民の「知る権利」―地域と大学のかかわりを考える」司会: コーディネーター」(於: 沖繩国際大学) 二〇〇五年五月七日
- 10 「<Y・Y・カンパニー>という絆―宮本百合子・湯浅芳子の往復書簡にみる女性同士の共同性とセクシュアリティ」(日本近代文学会 11月例会 於: 上智大学) 二〇〇八年十一月二十二日
- 11 「尾崎翠と少女たちの時空」(尾崎翠フォーラム2006) 鳥取 於: 鳥取県民文化会館) 二〇〇六年七月八日
- 12 「吉屋信子と少女たちの地下同盟―黒薔薇>というメディア戦略」(オルタナティブジェンダーヒストリー研究会 於: 同志社大学) 二〇一六年三月六日

- 13 「言葉と被傷性——クイア・スタディーズの現在と文学研究 ディスカッション」(日本近代文学会二月例会  
於：成蹊大学) 二〇一六年十一月二十六日
- 14 「田村俊子と『女声』の周辺——日中戦争下の文学の比較・交流研究」(第三九回南島文化市民講座 二〇一七年度  
協定校間国際学術交流講演会 於：沖繩国際大学) 二〇一七年十二月九日
- 15 「フレキシブルに抗うー女、セクシュアリティ、そして文学をめぐる対話」 松浦理英子をめぐる対話ー『親指  
Pの修行時代』とその後の旅」(YORAPプログラムICU 於：国際基督教大学) 二〇一八年三月四日
- 16 「シンポジウム 崎山多美へ現代沖繩文学のたぐらみ」 司会(日本社会文学会秋季大会 於：沖繩国際大学)  
二〇一八年十一月十日
- 17 「朱彩雲へ田村(佐藤)俊子の上海・北京・南京ー1938年12月ー1942年5月」 コメントーター(植  
民地文学会・フォーラム「植民地としての女性」 於：早稲田大学) 二〇一九年七月七日
- 18 「稲福日出夫「厳密でない学問の価値」についてー最終講義ノートをもとにー 司会・コメントーター」  
(第二〇七回シマ研究会 於：沖繩国際大学 南島文化研究所会議室) 二〇一九年一月二十一日
- 19 文部科学研究費における基盤研究B 「アメリカ占領下における沖繩文学の基礎的研究」(共同研究) 琉球大学  
仲程昌徳(研究代表) 二〇〇〇ー二〇〇五年

## VII 講演・社会活動など

- 1 『ひかりぐるま』編集・発行 創刊号(一九七八年四月五日)、秋季号(一九七八年九月一日)
- 2 「逆光の『智恵子抄』をめぐる」(東京都国立市公民館・市民講座) 一九八六年六月
- 3 「文学作品における性の荒野」(大阪府立婦人会館女性学講座「性の研究会」第7回講師) 一九八六年十二月十三  
日

- 4 那覇市「働く婦人の家」女性学講座講師（於：那覇市働く婦人の家）一九八九年九月～一九九一年三月
- 5 那覇市女性学専門委員会委員（於：那覇市役所）一九九〇年五月～一九九二年三月
- 6 『女声』とその周辺―日中十五年戦争下の文学の比較・交流研究―（『世界の中の女性』沖縄県人材育成財団国外派遣員の研究報告 於：那覇市働く婦人の家）一九九三年三月
- 7 国際シンポジウム『占領と文学』実行委員（日本社会文学会主催 於：沖縄タイムスホールほか）一九九一年十一月十六日～十七日
- 8 新沖縄文学賞 第一次選考委員・選評（沖縄タイムス社）一九九四年～二〇〇一年
- 9 「オトメの身体」をめぐって」（那覇市首里図書館 第四八回読書週間「講演とビデオの集い」）一九九四年十一月
- 10 「近代女性作家の戦略と戦術」（沖縄国際大学公開講座「女性研究の展望と期待」 於：沖縄国際大学）一九九五  
年六月十七日
- 11 「フォーラム男と女の『自立と共生』」（沖縄女子短期大学公開講座パネリスト 於：沖縄女子短期大学）  
一九九七年十二月二十日
- 12 「性役割とジェンダー」（宜野湾市主催「フォーラム女と男―新しい生き方を求めて―」パネリスト）一九九八年  
一月二十六日
- 13 「小説・映画からホモソーシャル（男同士の絆と権力関係）の表象について考える」（於：沖縄県女性総合センター  
でいる）二〇〇四年二月三日
- 14 「シマコトバの文体戦略を考える―崎山多美の「ゆらていく ゆりていく」をへゆんたくくひんたく」読みながら」（北中城じんぶん大学・第三九回講座 於：大城公民館）二〇一九年十一月二十八日